

1 ページ：漢字の読み書き・同音異義語

【漢字の書き取り：同音異義語】

学級イイン：委員（特定の役目を持つ人）

歯科イイン：医院（診療所・病院）

ジシンを持つ：自信（自分を信じること）

自分ジシン：自身（そのもの、自分自身）

タイショウとした：対象（目標や相手）

タイショウ的な性格：対照

（二つのものを比べること）

【同訓異字の使い分け】

わすれモノ／モノがいる：物／者

アツイ日／アツ着／アツイお茶：暑い／厚／熱

ハヤク走る／ハヤク目的地に：速／早

ツく／気がツく：着／付

【漢字の読み（音訓）】

海：音・カイ／訓・うみ

草：音・ソウ／訓・くさ

休：音・キュウ／訓・やす（む）

売：音・バイ／訓・う（る）

【読み方をする漢字を書く】

① ちかーい：近

② とき：時

③ おなじ：同

④ あそぶ：遊

【線のカタカナを漢字一字で書く】

漁業：ギョ／漁師：リョウ

尊重：チョウ／比重：ジュウ

訪れる：おとず（れる）

訪ねる：たず（ねる）

閉ざす：と（ざす）

閉める：し（める）

2 ページ：語彙の選択・熟語の構成

【文脈に合う漢字の選択】

問1（カテイ）：ウ（過程）

物事が変化していく道筋のこと。

問2（ジキ）：ア（次期）

「次の期間」を指す。

問3（カンコウ）：イ（慣行）

ならわしとして行われていること。

問4（ハカル）：イ（計る）

時間や数などを調べる際に使う。

問5（タツ）：ウ（絶つ）

関係や連絡を切り離すこと。

【同音異義語】

問1（アツイ）：イ（熱い）

熱量（水の温度など）が高いことを指す。

問2（ネ）：イ（根）

植物の器官としての「ね」。

問3（ノボル）：ウ（上る）

数量が一定の程度に達すること。

問4（キカン）：エ（器官）

生物の体を構成する一部分。

問5（キセイ）：ア（帰省）

ふるさとに帰ること。

【訓読みの組み合わせ】

問1（雨具）：エ 湯桶（ゆとう）読み

「あま（訓）＋グ（音）」の組み合わせ。

問2（音読みのもの）：ア（劇）

「ゲキ」は音読み。

問3（訓読みのもの）：イ（傷）

「キズ」

問4（二字とも音読み）：ウ（着陸）

「チャク・リク」ともに音読み。

問5（二字とも訓読み）：エ（小型）

「こ・がた」ともに訓読み。

【熟語の読みと熟字訓】

問1（音読みのもの）：エ（絵本）

「ホン」が音読み。

問2（駅前）：重箱（じゅうばこ）読み

「エキ（音）＋まえ（訓）」の組み合わせ。

問3（やおや）：ア（八百屋）

熟字訓として「八百屋」と書く。

問4（名残）：ウ（なごり）

熟字訓

漢字の組み合わせに特別な読みを当てたもの。

問5（景色）：イ（けしき）

熟字訓としての読み方。

3 ページ：慣用句・ことわざ・敬語

【慣用句：体の一部や動物を使った表現】

問1：距離が近い

正解：ア（目と鼻の先）

問2：「足」が入るもの

正解：エ（元を見る→足元を見る）

問3：共通して当てはまる言葉

正解：ア（胸） ※「胸がすく」「胸におさめる」
「胸をなでおろす」「胸がつぶれる」となります。

問4：いざこざをなかつたことにする

正解：ウ（水に流す）

問5：「猫」が入るもの

正解：ウ（をかぶる→猫をかぶる）

【ことわざ・故事成語・語彙】

問1：大きな権力をもっている者がよい

正解：ウ（寄らば大樹の陰）

問2：「泣きっ面に蜂」と似た意味

正解：ア（弱り目にたたり目）

問3：「果報は寝て待て」と反対の意味

正解：ウ（思い立ったが吉日）

問4：虎の威を借る（狐）の意味

正解：エ

（権力のある者の力を後ろ盾にして威張ること）

問5：「浮足立つ」の意味

正解：ア（恐れや不安でそわそわする）

【敬語の分類】

問1：丁寧語ではないもの

正解：エ（見学される）

※「される」は尊敬の助動詞です。

問2：美化語ではないもの

正解：イ（お手紙を差しあげる）

※先生へ出す手紙をへりくだって表現する「謙讓語」
にあたります。

問3：尊敬語ではないもの

正解：エ（お尋ねする）

※自分が行う動作なので謙讓語です。

問4：謙讓語ではないもの

正解：イ（おいでになる）

※先生の動作を高める尊敬語です。

【適切な敬語への書き換え】

問5：「言う」の謙讓語

正解：ア（申し上げる）

問1：「いる」の尊敬語

正解：ア（いらっしゃる）

問2：「着る」の尊敬語

正解：ウ（お召しになって）

問3：「行く」の謙讓語

正解：ア（伺い）

問4：「与える」の謙讓語

正解：ウ（差し上げる）

4 ページ：四字熟語・助詞・助動詞

【四字熟語：構成と意味】

問1：熟語の構成（晴耕雨読と同じもの）

正解：ア（東西南北） 解説：「晴・雨」「耕・読」の
ように反対や対になる言葉を組み合わせた構成です。

問2：日進月歩の意味

正解：ア（絶え間なく進歩すること）

問3：空欄 A・B（有名無実）

正解：ウ（A 有 B 無）

問4：一挙兩得の意味

正解：エ（一つの行動で二つの利益を得ること）

問5：漢字の正誤

正解：ア（半信半疑） 解説：他は「針小棒大」「異
口同音」「絶体絶命」が正解です。

【四字熟語：意味と空欄補充】

問1：竜頭蛇尾の意味

正解：エ（初めは勢いが盛んだが、終わりはふるわ
ないこと）

問2：意味に合う四字熟語

正解：イ（朝三暮四）

問3：空欄補充（馬耳東風）

正解：ア（馬）

問4：空欄補充（千差万別）

正解：ウ（千）

問5：空欄補充（三寒四温）

正解：ウ（A 三 B 四）

【文法：助詞の働き】

問1：接続助詞「から」の働き（理由）

正解：ウ（眠いから、早く寝よう。） 解説：原因・理由を表す「から」を選びます。アは起点、ウが理由です。

問2：副助詞の識別

正解：ウ（彼はサッカーもできるし……） 解説：添加・強調の「も」が副助詞です。

【文法：助動詞の識別】

問3：受身の助動詞「れる」

正解：イ（観光客に道を聞かれる。） 解説：例文「選ばれる」と同じ「受身」の意味です。アは自発、ウは可能、エは尊敬です。

問4：助動詞であるもの（使役）

正解：ア（妹にごみを拾わせる。） 解説：「拾わ（動詞未然形）+せる（助動詞）」の構成です。他は一つの動詞です。

問5：助動詞の「ない」（否定）

正解：イ（廊下は走らない。） 解説：動詞の未然形につく「ない」が助動詞です。他は形容詞です。

【文法：助動詞の推量・存続】

問1：推量の助動詞「う」

正解：エ（明日は今日より寒かろう。） 解説：例文「うれしかろう」と同じく、形容詞につく推量です。ア・イ・ウは意志や準備です。

問2：打ち消し推量・意志の「まい」

正解：イ（決して泣くまい……） 解説：これだけが「意志（～しないつもりだ）」で、他は「推量（～ないだろう）」です。

問3：存続の助動詞「た」

正解：イ（よく冷えた麦茶を飲む。） 解説：状態が続いていることを表す「～している（状態）」の「た」です。

問4：推定の「らしい」ではないもの

正解：ウ（先生が作った詩はすばらしい。） 解説：「すばらしい」は一つの形容詞であり、助動詞ではありません。

5 ページ：読解（岡本太郎「今日の芸術」）

番号解答根拠・解説

① ○ 第1段落に「ほんとうの芸術は、なぜこち

よくないのでしょうか」、第3段落に「創造的な芸術には、けっしてそういう安心感がありません」と明記されています。

- ② × 第1段落で「時代の常識にさからって、まったく独自のものを、そこに生み出している」と述べており、「常識の中で」という記述は誤りです。
- ③ × 第1段落で「かならず見るひとに一種の緊張を強要します」と述べており、緊張をほぐすものではありません。
- ④ ○ 第2段落で「既成の知識だけでは、どうしてもそれを理解し判断することができない」と述べている内容と合致しています
- ⑤ × 本文では、見なれた作品（富士山など）は「なにも努力しないですむ」ものであり、芸術の本質はそこから離れた「飛躍的な創造」にあるとしています。見なれたものを改変する努力が創造性であるとは述べられていません。

6 ページ：読解（福沢諭吉「学問のすすめ」）

- ① × 本文冒頭で「天は人の上に人を造らず……」と述べ、生まれながらの上下を否定しています。現実には生じている差は、生まれつきの才能ではなく「学ぶと学ばざるとによりて出来る」ものだと説明されています。
- ② ○ 本文中に、賢人とおろかな人のありさまが「雲と泥との相違（雲泥の差）」に似ているのは、「学ぶと学ばざるとによりて出来るものなり」とはっきり記されています。
- ③ × 本文は、学びによって「差が生まれる」ことを説いています。生まれながらの多彩さを「修正する」といった論旨ではありません。
- ④ × 「天は人の上下を造らず」とは言っていますが、現実にある賢人と愚人の「別（区別）」は、学問の結果として生じる正当なものとして認めています。
- ⑤ ○ 学ぶことで「賢人」となり、その結果として「むずかしき仕事」をするようになり、世間から「身分重き人（価値の高い人）」と評されるようになる、という論理構成と合致しています。

7 ページ：読解（岡本かの子「鮎」）

- ① ○ 本文全体を通じて、固有名詞ではなく「母親」という呼称が使われています。これにより、特定の親子関係を超えた、普遍的な母性の物語としての深みが出ています。
- ② × 「今のは、たしかに……」という部分は、直後に「そう気づくと」とあるように、実際の発話ではなく子供の内面的な気づき（心理）をカギカッコで表現したものです。
- ③ ○ 自分が内緒で呼んでいる「幻想のなかの母」と、目の前で鮎を握る「母」が、重なり合っていく物語構成になっています。
- ④ ○ 「薔薇いろの手」という色彩表現や、「手品師のように」という直喩が効果的に使われており、描写が非常に具体的で感覚的です。
- ⑤ ○ 鮎を食べる熱中が「意識しない一つの気持ちの痺れた世界」を生み出しており、食べられなかったものを克服することが、母子の一体感（救済）へとつながっています。